

---

# 約束～舞い散る桜の木の下で～

青海空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

約束〜舞い散る桜の木の下で〜

### 【Nコード】

N0858S

### 【作者名】

青海空

### 【あらすじ】

こんなにも弱虫な僕と、一緒にいてくれた君。そんな君との別れの日が、やってきた。

## （前書き）

どうも、青海空です。

ふと、ある画像を見た時に、この画像をモチーフにした小説を書きたい！ という衝動に駆られ、書いたのがこの短編です。

最後まで読んでくださると、嬉しいですm（ ）m

「どうかした？」

薄桃色の桜の花びらが舞い散る中。

橋の手すりに両腕を乗つけて、こちらを覗き込むようにクスクス微笑んでいる君は、凄く大人びて見えた。

橋の下では、桜の花びらを乗せた透明な川が悠然と流れている。

「綺麗だなんて」

僕は空を仰ぎながら呟く。

どこまでも透き通るような、蒼天の空へと桜の花びらが舞い上がる情景は、儚いほどに美しかった。青と桜色が織り成す色のコントラストに、思わず目を背けたくなる。

「そうだね」

君も僕と同じように空を見上げた。

「ホントにそれだけ？」

でも、それも束の間。

君は僕の方に向き直って、いたずらっぽく笑った。

どうして君はいつもそうなんだろう？

僕の思っていることなんか全てお見通しでいて、心の隙間にするつと入ってくるんだ。

「……本当に終わったんだなんて」

いざ、現実を口に出した途端、目頭が熱くなってきた。

どうしよう。さっき、あんなに泣いたのに……また、僕は泣いてしまっのか？

「弘樹はホント、泣き虫だね」

「う、うるさい」

目に涙が溜まっているのに気付いたのか、君があきれたように指摘する。

僕は目をゴシゴシ擦って、無理にでも涙を拭き取った。

「さつき、あんなに泣いたじゃん」

さつき。

それは、卒業式のことだ。僕達が通っていた高校の、卒業式。

「私たちの決別は、卒業式でやったはずだけど？」

『決別』

その言葉が、僕に重くのしかかる。

そう。

君とは、今日を以ってさよならなのだ。

あれ……

僕の頬を涙が伝っていた。

拭っても拭っても、湧き出るように流れる涙。

「弘樹」

「ごめん、わかつ、てるんだ。わかつてるのに……涙が、止まらなくて」

何を言ってるんだ僕は。

ホントはわかってなんかいないくせに。

君がいなくなる。

その現実を認めてなんかいないくせに。

「弘樹」

「！」

ふと、僕の体を温かい何かが包み込んだ。

「落ち着いて、弘樹」

僕の耳元で君が囁く。

ああ。何て……

何て、落ち着くのだろう。君の温もりを感じるだけで、こんなにも安心していられる。

「大丈夫。また、いつか会えるから」

幼い子供をあやすように、君は僕の背中をポンポン叩く。  
でも

だからこそ、この温もりを失いたくなかった。僕は君の背中に腕を回して、その体を強く抱きしめる。

「痛いよ弘樹」

「うん」

それでも僕は、力を緩めたりはしなかった。

君も、あきらめたように「仕方ないなあ」なんて、文句を垂らし  
ている。

「弘樹。そろそろ……」

君の別れを知らせる言葉に、僕は胸がキュツと締め付けられるの  
を感じた。

「弘樹」

名前を呼ばれ、力を緩めていなかったことに気付いた僕は、ゆっ  
くりと君を離れた。

卒業式が終わったら、この街を出て行く。

そう君に告げられたのは、卒業式の一週間前のことだった。

.....  
.....  
.....

「え？」

いつも通り、君と並んで帰路を歩いていた時だった。

君が言ったことが信じられなくて、僕は思わず聞き返す。

「私、この高校を卒業したら街を出るの」

だが、聞き返したところで何も変わらなかった。君は同じことをきっぱりと言った。

「冗談、だよな？」

「冗談じゃない。ホントのこと」

君の目は、とても嘘を言っているようには見えなかった。

「卒業式が終わったら、そのまま行くから」

僕は何も言い返せなかった。

僕が何と言おうと、その事実を変えることは出来ないと、心のどこかでわかっていた。

「あと、1週間」

「うん。あと1週間」

「ねえ」

「ん？」

「学校サボって遊びに行こう」

僕の提案に、君は驚いたように目を見開いた。

「真面目っ子な弘樹が、そんなこと言うなんて」

「いいんだ。もう高校は決まってるし、学校なんて行かなくてもいいから」

それに、学校にいる時間と、君という時間のどちらが大切か、なんて迷うはずもなかった。

「卒業式までの1週間。僕と学校サボって、遊びに行こう」

君はそんな大胆な僕の提案に、ふふつと笑って見せた。

「勿論、喜んで」

そして、僕らの最後の1週間が始まった。

水族館、動物園、映画、遊園地、野球観戦、植物園……  
典型的なデイトスポットに毎日のように二人で出掛け、時には旅館に泊まったりした。

こんな毎日がいつまでもいつまでも、続いたらいいのに。  
こんな楽しい日々が、いつまでも  
でも、そんな日々に終止符を打つ日がやってくることには、抗い  
ようがなかった。

卒業式の『仰げば尊し』斉唱の時、僕は人目を憚<sup>はば</sup>ることなく、ガ  
キのように泣きじゃくった。

……  
……  
……

「それじゃあね」

君は僕の傍を離れ、俯きながら僕に背を向けた。

「ねえ！」

僕はその背中に思わず叫ぶ。

余りにも、君の態度が淡々としていたから。

君は僕に背を向けたまま、その場に立ち止まった。

「どうして、そんなに平静でいられるの？ 僕と離れ離れになるの  
は、嫌じゃないの？」

「……………」



君は僕に背を向けたまま、何も言わない。

「ねえ！」

「そんなの、嫌に決まってるじゃない！」

「！」

君が僕に、初めて感情を露わにした瞬間だった。

君の瞳からは、涙が溢れていた。

「弘樹は弱虫だから……だから、私が落ち込んでちや駄目だから……だから、必死に弘樹の前では笑っていようって決めたんじゃない！」

僕が

僕が弱虫なばかりに、君は無理していたというのか。

僕が、君を苦しめていたのか……？

「ごめん」

「……馬鹿」

「ごめん。僕が弱虫だから、君を苦しめてたんだね」

「それは違うよ」

君は涙を指先で掬い取りながら、頬を歪ませた。

「私は、弘樹の弱虫なところを含めて、弘樹のことが好きなの……好きになったの。わかるでしょ？」

君は涙目で、僕に微笑んだ。思わず、僕は頷いてしまう。

「それじゃあ、ホントに行くね」

君は名残惜しそうに、手を振って僕に背を向けた。

「ねえ！」

君はこちらには振り返らない。でも、それでも構わなかった。

僕はそのまま続けた。

「もっと強くなって、君を迎えに行くから！ 何年かかるかわからないけど、お金貯めて君の元に行くから！ だから、それまで待って！」

君は肩を震わせる。

「次に会う時は、君が甘えられるくらい強くなってるから！ だか

ら、待ってて！」

僕の宣言に、君はゆっくりと振り返ると、

「待ってる！」

涙を浮かべながら、君は満面の笑顔を咲かせた。

満開の桜にも負けないくらい、大きな笑顔の花を

\*

あれから、5年の月日が経った。

長かった。ホントに、ホントに長かった。

親の反対を振り切って大学に行かず、ひたすらバイトに明け暮れた。

早朝からバイトに出掛け、夕方の6時頃に家に帰り、泥のように眠る。

そんな日々をひたすらに繰り返すことを、1年以上続けてきた。

飛行機が空港に到着し、キャリアバックを受け取ってから、エントランスの方へ向かう。

君には既にメールを送って、この飛行機に乗る旨を伝えたんだけど……

僕は周りを見渡して、君の姿を探し求めた。

「弘樹！」

僕は思わず笑ってしまった。

5年も経ったのに、全く変わっていない声。

それが何となく嬉しかった。

容姿はどうなんだろう？

昔よりも綺麗になったのかな？ それとも

僕は声が聞こえた方

後ろをゆっくり振り返った。

｝ f i n ｝

（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます！！

最後の1週間を、簡単に終わらせてしまってますいません。  
短編ですので、省略してしまいました（汗

いかがだったでしょうか？

感想、批評など、書いていただけると凄く嬉しいです（^^）  
評価点を付けていただけるだけでも、凄く励みになりますので、よろしくお願い致しますm（――）m

ではでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0858s/>

---

約束～舞い散る桜の木の下で～

2011年3月31日17時10分発行